

IAUP 2014 横浜総会 閉会挨拶

世界大学総長協会（IAUP）会長 佐藤東洋士

3年に1度開催されるこの総会のホストとして第17回目の総会が成功裏に終了することを、大変嬉しく思います。

神戸で第10回IAUP総会を開催してから21年が経過しました。その間、日本では前回の開催地であった神戸で大地震があり、更に3年前には東北地方で大地震が発生し、それに伴う津波で多数の犠牲者を出しました。この震災のときに世界各国の大学から受けた支援は、私たちの大きな励みとなりました。

東北地方太平洋沖地震により、東京以北の大学では多くの人的・物的損失がありました。例えば、私の大学の学生も春休みで帰省中に母・祖母と共に津波にのみ込まれて尊い生命を失いました。しかし、このかつて無かった大きな試練を得て、大学生たちは互いに支え助け合うことの大切さを学びました。また、多くの大学が新たなネットワークを作り、災害復旧のために学生・教職員が現地で復旧支援を始め、今日なお続いています。

さて、今回の総会を振り返ると、6月11日のウェルカム・レセプションは酒の鏡開きから始まり、古い馴染みの顔、新たに参加した顔、それぞれに新しいひとときを過ごしていただくことが出来たと思います。12日の開会式には、山中伸一文部科学事務次官にご出席いただきました。更に、計画段階ではご出席予定であった、潘基文国際連合事務総長の力強いメッセージを、ピーター・ラウンスキー＝ティーフエンタール国際連合事務次長からいただきました。

それ以降、全体セッション、個別セッションが3日間にわたってもたれ、参加者にとって有意義なものでありました。特に新しい試みとして、“Voices of the Future”という学生によるセッションを持つことができたのは、主催者として大変有意義であったと感じております。各セッションの内容については、参加者がそれぞれに印象をお持ちになったことと思います。ですから、ここで私が各セッションについて細かく申し上げることはいたしませんが、今回の大会が前回までと同様に多くの機関、例えば、UN、UNAI、UNU、IIE、IAU、ACEなどから、多大な協力を得て終わることができたことに心から感謝申し上げます。

これから3年間、会長職は日本に移されることになりました。私は、マイケル・アダ

ムス元 IAUP 会長、それからニール・キング IAUP 会長から引き継ぐこととなります。これから 3 年間、従来組織で蓄積してきた様々な活動を、より実効性のあるものとして伸展できるようサポートしたいと考えております。

また、次の会長職はヨーロッパに移ることが決まっており、3 年後の大会はウィーンで開催されます。次期会長として、カカ・シェンゲリア氏、次期事務総長としてジェラルド・ライジンガー氏、次期財務担当理事としてエリザベス・デイビス＝ラッセル氏が選ばれています。

12 日には潘基文国際連合事務総長を最初の受賞者として、IAUP は「マイケル・アダムス賞」を差上げました。このことは私たち IAUP メンバーが、高等教育に多大な貢献をしたマイケル・アダムス氏のことを忘れることなく、これからの高等教育の持続的発展に活かす決意の表れでもあります。

ここで改めて紹介いたしますが、これから 3 年間、事務総長としてアルバロ・ロモ氏、財務担当理事として谷岡一郎氏、そして彼らをサポートするメンバーが IAUP を運営していきます。

具体的な活動として、次の 3 つの領域に力を入れていく予定です。

1 つ目は、国際的に高等教育を強化することです。“The United Nations Academic Impact”、“ASPIRE/IAUP”、“Qatar Foundation/IAUP/IIE WISE Education Leadership Programme”、“IIE/IAUP Partnership on promoting Student Exchange” などのプロジェクトを通して、教育を更に可動的にそして多様にすることで、世界の高等教育のレベルを高めていきたいと考えております。

2 つ目は、社会の秩序崩壊などにより、教育や研究が成り立っていない地域の学生・教育者の救済です。“IAUP/UN Commission on Disarmament Education, Conflict Resolution & Peace”、“IIE/IAUP Scholars Rescue Fund” が具体的なプロジェクトになります。

最後は、世界レベルそして地域レベルでの、国内外の大学間ネットワークおよび国際連合、国際復興開発銀行などの機関との協力関係を通して、教育を開発し発展させることです。特にアフリカは特別な協力を必要としており、これから私達はアフリカ・イニシアティブ・プロジェクトのリーダー達をサポートしていきたいと考えております。

来年はすでにアナウンスがあったように、IAUP の 50 周年アニバーサリーを IAUP 発祥地であるオックスフォードとロクストンで開催する予定です。今までお話ししてきたことを踏まえ、50 周年アニバーサリーに向けて、力強いサポートをいただきたいと思います。

います。

私たちは 21 世紀に入って既に第二ディケードの中間におり、人間社会が迫られている課題はいよいよ明確になってきています。ご存じのとおり、私たちが生きてきた 20 世紀は激動の世紀でありました。

科学技術を取り上げると、20 世紀は様々な発明発見による幕開けがありました。1903 年にアメリカのノースカロライナ州キティーホークでウィルバーとオービル・ライト兄弟は身を刺すような寒風の中を離陸し、空気より重い飛行機を飛ばすことに初めて成功しました。今日みるように超音速で移動したり、ロケットで宇宙空間に飛び出すことを可能にする第一歩を踏み出したのです。1902 年、カナダのレジナルド・フェッセンデンが電気通信に音声のをせることに成功し、ラジオ放送が始まり、通信が同時に多数の人に伝えられるようになりました。今では音声のみならず画像が世界中に瞬時に伝えられるようになり、また携帯端末が普及するようになったのもこの発明のおかげです。1908 年にはヘンリー・フォードが T 型フォード製造に流れ作業を導入し、誰でも自動車を持つことが出来る時代の先駆けとなり、今日のモータリゼーションの世界を生み出しました。

この 20 世紀初頭に始まる科学技術の革新は、人類の生活環境のみならず社会構造をも進化させました。労働者階級による社会改革の要求、ヨーロッパ小国家群から台頭した民族主義の機運が、徐々に世界中に緊張を招いていきました。そしてこれが、1914 年の第一次世界大戦、ロシア革命へとつながっていったとも言えましょう。近代技術の威力は想像を絶するような破壊力をもたらし、人類は第一次世界大戦で一千万人以上の死傷者を出し、第二次世界大戦では核兵器まで出現し、絶望が世界を覆いました。19 世紀までのある意味で無邪気であった時代が終わり、個々の国家や民族の生存をかけた競争の時代に入ったのです。

20 世紀において急速に発展してきた近代社会は、人間の福利という点では「光」をもたらしているともいえる訳ですが、同時に、一方では二度の世界大戦、民族紛争、経済恐慌、自然環境破壊などの、生命を脅かすような「影」をももたらしていることは事実であります。21 世紀を生きる私たちは、この「光」を進展させ、逆に「影」の面を制御して、地球規模での持続可能な発展を図ることが責務であります。その意味で、地球規模で大学に寄せられる期待は、大変大きなものがあります。

21 世紀末はどのような状況になっているのでしょうか。今から 85 年後を予測すること

は極めて困難ですが、21世紀は「和」を保ちながら人類は歩みを進めていかなければなりません。その意味で私たちが21世紀末に向かって生きていくためのキーワードは「共生」であると私は考えます。本来生物学的用語であった「共生」という言葉を英語に翻訳解釈するときに、最近では“Living and working together for common good”としています。つまり「共生」とは公益全てのものの共通の利益のために共に生き、共に働くことであります。

世界の人口が10億人になったのは1810年でした。20億人になるのはそれから115年、30億人になるには35年、40億人になるには15年かかりました。そして、1987年7月11日に人類は50億人に達し、1999年には60億人になりました。推計では2025年には81億人になると、統計が示しています。世界人口の増加に伴い、高等教育のあり方も変わってきました。

高等教育は12世紀末、世界の人口が約4億人であった頃、ボロニア大学、次いで創立したパリ大学が西欧における大学の始まりであります。当初は現在のようなキャンパスの講義室で教授の授業をまとまって聞くという形式ではなく、老いも若きも、地位のある人もない人も、ただローマ法・教会法を学びたいということで集まって、その道のすぐれた人から話を聞くというかたちであったようです。

その頃の特別な人達のための大学は大きく変化をし、今日では学びたい者は誰でも大学で学ぶ機会を得ることができるようになりました。大学が、教育学者マーチン・トロウのいうユニバーサルアクセスの対象となったとも言えます。大学は人口増加や、社会の高等教育に期待する需要・価値観の変化により、量的にもまた範囲も大きく変わりました。いわゆる古典7学を教えるリベラルアーツとしての大学は、今では職業アクセスの準備のための教育となりました。更に教育の方法も、遠隔地教育などの発展により大いに変わりました。しかしながら地球規模で世界をみると、大きな格差がまだ存在するというのも事実であります。私達大学人は常に世界でおきていることを敏感に捉えて、世界の動きを勇気をもって注視しなければなりません。

社会は様々な異なる文化、異なる宗教、異なる価値観を持つものが共同・協調していくところです。特にそれぞれの国の文化・宗教・歴史を尊重し、互いの立場を理解する必要があります。多様性を尊重するとともに、人の痛みを理解し、相手の立場で物事を考えることができるように、大学人が努力することが求められると信じております。

挨拶の結びとして、2つのことばを引用したいと思います。

1つは種の起源をあらわしたチャールズ・ダーウィンの “It is not the strongest of the species that survives, nor the most intelligent, but the one most responsive to change.” (最も強いものが生き残れるわけでもなく、最も賢いものが生き残れるわけでもない。唯一生き残れるのは変化に対応できるものである) です。

2つ目は、アメリカの神学者ラインホルド・ニーバーの “Serenity Prayer” (ニーバーの祈り) です。

“O God, give us
serenity to accept what cannot be changed,
courage to change what should be changed,
and wisdom to distinguish the one from the other. ”

(神よ、
変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵
を与えたまえ)

これらのことばは、目まぐるしく変化する社会において、大学も生き残りをかけて変化していかなければいけない、という教訓です。また私はこの教訓を更に発展させ、高等教育を社会のために受動的ではなく積極的に変えていくべきであると考えます。

これから IAUP がセカンド・ハーフ・センチュリーを人類のため、そして平和のために常に新しい道を切り開く存在でいてほしいと願いつつ、私のメッセージといたします。

(2014年6月14日)